

埋蔵文化財関係用語の収集と整理

埋蔵文化財センター

昭和50年度中の全国の発掘調査は2万4千件をうわまわり、調査報告書類の数だけでも700冊を越えるというように、発掘調査件数の急激な増加にともない、埋蔵文化財関係の情報資料は膨大な量となって、その種類についてみても様々な形をとるようになってきた。調査報告書類、雑誌論文、航空写真、地図あるいは図面等の資料の全貌は、もはや誰にも把握しきれない。このため現在、研究、文化財保護の仕事にたずさわる者が、過去の資料の蓄積を適切に選択して利用するのは、大変に難しいという状況にあり、将来この傾向がさらに甚しくなることは目にみえている。

埋蔵文化財センターは、昭和51年度から、埋蔵文化財関係の情報資料の整理、編集、検索システムの確立を目指して、コンピューターの利用を前提とする研究を開始した。これは、以前からすすめられている、資料の収集および、調査報告書、雑誌論文等のマイクロフィルム化などの仕事とともに、当センターの重要な将来事業計画の一環を担うもので、全国の研究、遺跡保護行政機関が主な対象となる各種資料の共同利用組織を実現することを目的としている。

いかなる形であれ、コンピューターを利用した資料の整理、検索は、考古学関係の学術用語が主体となった単語の群を媒体として行なうのが、最も自然かつ有効な形であることはいうまでもない。たとえば情報資料全体を遺跡を核として整理、編集し、互に関連づけた上で「縄文時代中期」、「墳墓」、「土器」、「～県」などのようなキーワードを与えて、これを満足する資料を抜き出させる、というような資料検索のシステムも想像できよう。ここで、学問の進捗段階に従っての学術用語の変遷、縄文時代、弥生時代あるいは仏教関係など対象分野による傾向のちがい、用語の内包する概念の変化、特定の語の消長等に関して、客観的な資料にもとづく検討が、まず必要となる。この作業は、それ自体でも学史的な意味をもちうるかも知れないが、なにより資料活用のシステムの基本的な構造を考え、検索のための媒体となる用語リストを作り出す上で、不可欠といつていい。

本年度はこの仕事の第一歩として、世界考古学大系（日本）のI～IV巻を資料に選び、この中に含まれる65万字すべてをコンピューターに入れ、約3万種類の用語を旧石器、縄文、弥生などの時代区分ごとに、出現頻度とともに抽出した。これについて考古学の学術用語、関連諸学の学術用語、重要な一般語、それぞれから派生する語、その他の用語という分類を行なった上で、現在構造分析、用語の体係づけの作業を続けている。コンピューターによる用語抽出のプログラムについても、いくつかの問題点が明らかになった。次年度以降はこれを改良した上で、さらに多くの考古学関係の文献資料について同様の作業をすすめる。表題の研究は、当面充分な量の資料についての検討と整理のうちに、作業のとりまとめとして考古学関係用語シソーラスを作成することを目標に置いている。

（岩本 圭輔）